たのしい学び。本当の学び。大人も子どもも！— クラス便りとエッセイ

山びこ通信

DISCE LIBENS!
学校法人 北白川学園
山の学校
LVDVS COLLINVS

2017
Sept.-Dec.
秋
学期号

クラス一覧 ページ　ことば 7　かず 9　しぜん 17~19　かいが 4　つくる 5,6　れきし　将棋 16
西洋の児童文学を読む 3　西洋古典を読む 20　数学が生まれる物語を読む
数学 9,10　英語 11,12　漢文　東洋古典を読む　ユークリッド幾何
ギリシャ語 15　ラテン語 15,16　イタリア語 12　ロシア語 14　フランス語 13　ドイツ語
山の学校ゼミ『社会 ／数学 ／調査研究 7／法律／生活と文化／倫理 7』　ウェブプログラミング

温故知新と西洋古典

山の学校代表　**山下 太郎**

「古今東西」という言葉があるが、「東の今」を生きる日本人にとって、一番距離の遠いのが西洋の古典（クラシックス）である。ここで言うクラシックスは音楽のクラシック（西洋古典音楽）のことではない。クラシック音楽なら幼稚園の子どもでもピアノを習って親しんでいる。他方、西洋文明のバックボーンをなすクラシックス（西洋古典学）に我が国の教育は無関心を決め込み、子どもたちが学校教育で接する機会は皆無に近い。

一例として、プラトンやキケロの翻訳を読み議論する機会が学校で用意される世の中になればと心から願う。これらは西洋の古典であると同時に、人類の古典でもある（音楽のクラシックがそうであるように）。それが難しいとしても、せめて国を代表する政治家を志す若者には、西洋古代の哲人たちが国家について何をどう考え、どう論じたか、学んでほしい。

グローバル時代と言われて久しいが、我々はいまだ和魂洋才の呪縛から逃れることができずにいる（今は和魂の学びも怪しい）。古典は社会の常識を作る。戦後古典をなおざりにしてきた弊害が今の世相に表れ、前代未聞の非常識が連日のように新聞を賑わせている。西洋古典は世界の常識を形成する。日本は自国のことだけを考えてよいわけではない。地球の未来、人類の未来に責任を持つために、東洋の古典とともに西洋の古典を学ぶ必要がある。

山の学校では西洋古典の言語をじかに学ぶ機会を設けているが、なぜ現代人がギリシア語やラテン語を学ぶ必要があるのだろうか。この問いは、上で述べたようにわが国で議論されることはなく、欧米社会で問われてきた問いである。ラテン語は欧米社会の漢文である。それゆえ同じ趣旨の問いはわが国にもある。「なぜ古文や漢文を学ぶ必要があるのか」と。答えは「温故知新」ということになる。

古典は「会話」するために学ぶのではなく、古典作家と「対話」するために学ぶのである。それが社会の津々浦々で行われることによって、社会の常識が形成されていく。その意義が信じられ、実感されるゆえ、古典は営々と読み継がれて今がある。その証拠に、東西を問わず、古典作品は今も目の前に読める形で届いている（それを可能にするのが文学部の仕事である）。

目まぐるしく移り変わる現代社会において、古典を読む意義はますます大きなものになっている。それは西も東も変わらない。温故知新の意義は、すでに多くの人たちによって語られてきた。ただ、わが国で「古典」という言葉を聞いて、古文漢文（日本の古典と中国の古典）をイメージする人はいても、ギリシア・ローマの古典を想起する人は皆無に等しい。

私のささやかな提案は、一人でも多くの日本人が、クラシックス（西洋古典学）という 〈▶次ページへ続く〉

ジャンルに親しむことである。なぜかと理由を問われるなら、日本の法律、政治、教育、その他明治開国以降西洋を手本として取り入れた諸制度の根幹をなす精神にじかにふれることができるからだ。逆に言えば、それを知らずに、民主主義や教育の意義を語ることはできないだろう。たとえば、なぜ学校で勉強するのかと子どもに問われて答えに窮する大人は多い。人間を作り、市民を作るためである。言い換えるなら、民主主義を支える主権者を作るために子どもたちは学校で学ぶ必要がある。けっして、立身出世に役立てるため、といった個人的な理由で公教育が用意されるわけではない。

学問に有用性があるかどうかの議論がある。イソップに「胃袋と足」と題する話がある。胃袋も足も、心臓も脳も、体を構成するすべての部分が大事である。どれが一番ということはない。学問についても同様で、すべてのジャンルに存在理由がある。どれかが欠けたら穴の開いた風船になる。便宜的に理系と文系という言葉を用いれば、理系も文系もどちらも大事であり、虚学と実学のバランスも同様である。

理系では基礎研究が大事であるという議論をよく耳にするが、それだけ基礎研究が大事にされてきた証拠といえる。コンセンサスあればこそ、そうした議論が繰り返し出てくるのである。ひるがえって文系において、世界を視野に入れるならクラシックス（西洋古典学）の研究は不可欠であるが、このジャンルの研究が大事だという意見を耳にしたためしはない。つまり、ここだけがぽっかりと穴が開いている。

コップに水が半分入っている。この事実は良くも悪くも受け取れる。私が上で述べてきたことは、普通に読めばネガティブな話だが、視点を変えるとポジティブに聞こえる。明治開国以来、風船に穴のあいた状態で、よくぞここまでやってきたと思う。あとは穴をふさげばよい。それができたとき、この国の風船は、個人であれ学問の全体であれ、どこまでも高く世界の大空を飛翔するだろう。徐々にであってもそのような方向に世の中が変わっていくことを願いつつ、50 年先も 100 年先も、山の学校は変わらぬスタンスで活動を続けていきたい。（山下太郎）

すべての道はラテン語に通ず 「ラテン語講習会」のクラスだより

山の学校の古典語クラスの取り組みは、それぞれの先生の「クラスだより」をご覧いただくとして、私は 5 年前から取り組んでいる「ラテン語講習会」の現状についてお伝えしようと思います。

きっかけは、東京の知人から山の学校の分校を東京に作ってほしいと言われたことでした。最初はラテン語文法のクラスのみでしたが、今は講読クラスが主体です。文法クラスはお伝えする内容を必要最小限に絞り、全体を 6 回で終えるように工夫しました。そのときの教材をもとにして出来たのが、『しっかり学ぶ初級ラテン語』（ベレ出版、2013）と『しっかり身につくラテン語トレーニングブック』（ベレ出版、2015）です。

文法を終えた人向けにスタートしたのが、キケローの「スキーピオーの夢」の講読でした。ラテン語の知識ゼロからスタートし、6 回の文法を終えた段階でストレスなく予習できるにはどうすればよいか。私が出した答えは、「すべての単語の説明と逐語訳を載せた資料を用意する」でした。作成したファイルを事前にメールで送って予習してもらいます。このときの資料に全文訳を添えたものが『ラテン語を読む キケロー「スキーピオーの夢」』（ベレ出版、2017）です。

受講者の実数は 200 人を超えました。大学の授業と違って、様々な職種の人、年齢の人が参加されるので私にとっても大きな刺激になります。最年少は静岡の中学生。小学校の卒業文集にラテン語の格言を書き、トイレに変化表を貼って勉強しているそうです。中国の留学生は古今東西の言語を学ぶ秀才で、まだ大学 1 年にかかわらず、『カティリーナ弾劾』の講読では正確な解釈を披露してくれます。彼は日中の若者が「古典、とくに西洋古典を学ぶべき」という意見の持ち主です。アメリカの古典学専攻の学生が二度参加してくれました。「講読のスタイルがアメリカと同じなので驚いた」とのこと。日本では英語をこのスタイル（文法訳読方式）で教えていると言うと、それにも目を丸くしていました。

「ラテン語講習会」を通じ、「すべての道はラテン語に通ず」を実感するこの頃です。（山下太郎）

『西洋の児童文学を読む』　担当　福西 亮馬

トンケ・ドラフト『王への手紙』（西村由美訳、岩波少年文庫）を読んでいます（全 8 章）。まもなく第 3 章を読み終え、全体の 4 分の 1 に差しかかります。

「どこから来た？」「遠くから。」

これは主人公ティウリと、瀕死の騎士エトヴィネムとの合言葉です。

第 1 章は、ティウリがエトヴィネムに手紙を託されるまで。続いて第 2 章は、手紙の隠滅をはかる勢力（赤い騎兵たち）に命を狙われながら森を抜けるまで。そして第 3 章は、別勢力（騎士リストリディンたち）につかまって彼らと和解するまで、という内容でした。

ここまでに、ティウリは 4 人の人物（マヌケ、ヒロニムス、ラフォックス、ラヴィニア）から「どこから来た？　そしてどこへ行く？」と質問されます。それが疑われてであろうと信用されてであろうと、ティウリは慎重に答え、手紙を隠し通します。

「そなたには、秘密があるな？」

「はい、リストリディン騎士。」ティウリが言った。

「それが何かは、たずねまい。」

この短い会話に凝縮された「何か」が、物語の舞台となる国々と作品全体を支えています。それは一体何でしょうか？

ティウリは、ときに逃亡を選択し、臆病者と呼ばれます。そんなとき、心はもう騎士なので、彼は他人からつけられた偽りの評価を正したいという欲求に駆られます。けれども、「わたしはそなたを信頼する。」と言ってくれた騎士との約束を思い出して、自らを抑えます。そんな彼のために最後には味方が現れます。何でしょうか？　それは先の問いの答と同じものです。

もうお分かりだと思います。それは、騎士の言葉にもあった、「信頼」です。そしてそれこそが、彼の困難の原因ともなったものでした。信じるに値する人物が国に確かにいる、それにティウリもなろうとしている――このことは、読者の胸を熱くさせます。（なぜでしょうか？　それは読書が能動的な活動だからです！）

「どこへ行く？」という問いに、ティウリは隠者メナウレスの名前を出します。すると物をよく知る大人たち（ヒロニムス、ラフォックス）からは、「メナウレスさまのところに寄っていくのなら、それは、正しいことであろう。」と異口同音に励まされます。その響きは、ティウリが「そなたは騎士になるであろう。」と言われてエトヴィネムから手紙を託されたことを思い起こさせます。

ティウリはしばしば、それまでの出来事が遠い昔に思われ、この先もやっていけるのだろうかと、気弱になります。その都度、何かを目にしたり、記憶を手繰り寄せたりして、自分を励まします。たとえば星のようにきらっとした川面の光。それは首にぶら下げていた指輪――手紙とともに託された騎士の形見――の影でした。これは山下太郎先生に代講していただいた時でしたが、Aoni さんが、「前の箇所でも、夜空に一つだけ光る星を見てティウリが励まされたシーンがあった」と、そのページを指摘してくれました。それで、星はこの物語における希望の象徴なのだろうと、クラスでも確認できたということでした。

このような作品の濃密さを、一度読んでしまった後も、時間をかけて味わうことは善いことです。授業では一節ずつ進んでいます。音読を欠かさずして、要約と語彙、共感したことや気付いたことで意見交換しています。そのノートは、あとで何物にもかえがたい精神的な財産になるでしょう。

Kai 君と Eisuke 君が、冗談で「このままのペースだと、ぼくら中学生になってしまうな！」と言っていました。読書会という年単位の形式が初めてだからでしょう。私はむしろ、そのような体験こそ、今から持たせてあげたいと思います。

さて、これからも読む旅は続きます。生徒たちが読む限り、ティウリもまた旅を続けられます。彼が王に届けようとしている手紙には一体何が書かれているのでしょうか。生徒たちはすでに知っています。私もそれを山びこ通信で報告するときを心待ちにしています。

本を読むことを責任ある喜びだと言いかえられる仲間を、今もお待ちしています。

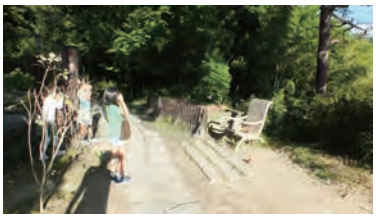
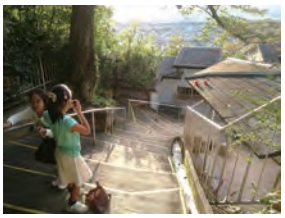
『かいが』A・B　　担当　梁川 健哲

6 月に、「一個の林檎を屋外の何処かに置いて描く」という課題を実施しました(A･B両クラス)。林檎を「役者」とするなら、「どのように演出し、場面を作るか」がこの課題の鍵です。

この流れを活かしつつ、「構図」や「視点」を探る面白さをさらに感じてもらうため、9 月には「カメラ」を用いた課題を取り入れました（B クラス)。前回の林檎に加え、蜜柑、茄子、パプリカ、かぼちゃなども用意し、それらをあちらこちらに連れて行っては自由に配役し、色々な角度から場面を切り取ります。インスタントカメラが 27 枚撮りなので、「27 枚の『いい画』づくりをしよう！」が合言葉です。

園庭の遊具に登らせてみたり、ベンチに腰掛けさせたり、芝生の丘をころがしてみたり。「先生、あと何枚撮れる？」としきりに残りのシャッター数を気にしながら、また、友達と相談したり協力し合ったりしながら、慎重に場面づくりが続きました。

このクラス便りが発行される頃には、皆さんと出来上がった写真を広げ、様々な意見を交していることでしょう。「写真に出来ること（写真にしかできないこと)」「絵画に出来ること（絵画にしか出来ないこと)」についても考えるきっかけとなり、何かを発見をしてくれることを期待しています。

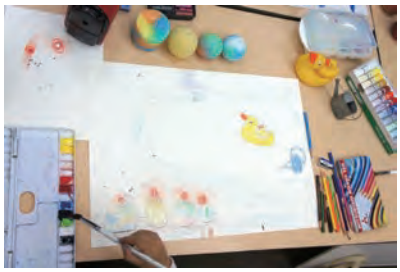
上記と本質的に繋がりますが、卓上に並べておいた小物を構成して画作りをする、いわゆる「静物画」の切り口でクラスを始めた日もありました（A クラス)。

Madoka ちゃんは、幾つかのロウソク、アヒルの置物、ブリキのジョウロを選びました。「よ～し、いいこと考えたぞ～！」と呟くときの彼女はいい表情をしています。そして何か考えがあって、アヒルを部屋の暗い場所へ持って行って「うん」と頷き、どんな色に見えるかを確かめ、ロウソクに灯った炎にはどのような色のパステルが似合うかなど、自発的に実験をしながら絵をつくっていきます。(火は実際に灯しませんでした。部屋を暗くし、火が灯った様子を観察したいか訊ねましたが、彼女は静かに首を横に振りました。）この時点で既に有り体な「静物画」の手法からは離れていますが、私は嬉しい気持ちで静かに見守っていました。

「先生、これ塗ってみたい…」一方の Masatou 君が思いついたことは、予期せぬことでした。モチーフとして置いておいたブリキのトラック「そのものに」色を塗ってみたいというのです。意表を突かれた私は当然、絵の中でトラックは思い通りの色にすることが出来ることや、どうしても立体にこだわるのであれば、ダンボール等でトラックを作ってから着彩してもよいことを伝えました。

しかし、じっとトラックから目を逸らさない彼の気持ちが切実であることを悟り、葛藤の末に「それじゃあ、塗ってみようか」と声をかけました。不思議と私自身、どんな風になるのか、好奇心を抱きはじめていることに気が付きました。

赤と青に塗り終えたトラックを眺める彼は、笑顔とは違う「なるほど、こうなるのか」と納得するような表情を浮かべていました。次に、水バケツの中で色が混ざり合う不思議さを見出した彼は、水彩紙に赤と青を用いて絵を描き始めました。「こういう風にしてみたよ」と今度ははにかみながら差し出したその絵は、「青と赤を交互に並べたもの」「赤（青）の上に青（赤）をのせたもの」「赤一色」の３つ。混色における大変示唆に富んだ実験をしてくれたと思います。



「課題」と言うとき、「限られた条件・制約の中で何が出来るのか」が重要なことは言うまでもありませんが、一方では「こちらで想定した課題」というのは、それだけでは常に不完全なものなのであって、子どもたちと心のやりとりしながら柔軟に課題そのものをアレンジし、「その子にとって、今、適切な課題」へと一緒に作り上げていくことも重要不可欠であると改めて実感しています。

『つくる』1～2年　　担当　山中壱朗

春学期に引き続き担当しております。今回は何ができるのか、何が起こるのかを思い浮かべながら山の学校に向かっているのですが、その予想通りになったことはありません。しかし、予想通りにいかなかったことが残念というわけではなく、発想の豊かさ、自由さに毎回感銘を受けております。

来て早々作業を始める生徒もいれば、（山の学校に着いた時点で）何を作るか特に決めていない生徒もいます。後者の場合でも、山の学校にある材料を見て回り、周囲とのやりとりを通して方向性が徐々に定まっていきます。作業の途中で方向性が変わることもよくありますが、90 分の時間内で様々な作品が仕上がります。春学期は家から持ってきた材料を使った作品、継続して取り組む作品が多かったのですが、秋学期は山の学校にある材料を時間内にうまく組み合わせた作品が多いです。また、

作ったものを互いに比較・鑑賞する場面、（作品に対する）一言をきっかけに話が展開していく場面が春学期と比べて多くなりました。形のあるものを作って終わりではなく、作ったものをどのように楽しむかについても目を向けているように感じます。

すでに完成されたものやサービスを享受し、楽しむことが日常生活で容易になった分、「つくる」の中では考えたり悩んだりしながら形にすることも楽しめるように見守っていきたいと思います。

『つくる』3年・4～6年　担当　福西 亮馬

毎回、最初に方向づけをして、あとは自由にできるように心がけています。そのために、テーマをできるだけシンプルにして、その分、自分で応用できる余裕を持たせています。この稿を書いている時点では、3 年生はお祭りの屋台（自由工作からのアイデア）を、4 ～ 6 年生は紙飛行機を中心にしました。

作りたいものを事前に調査しても、当日には思いがけない要求が飛び出します。クラスの主体は生徒たちにあるので、その要求が講師の予想をこえることはむしろよろこびです。たとえばこんな場合があります。まず、準備した素材に「スキ」が生じます。もちろん、わざとではありません。私は「ごめん、その材料は今ないんだ……」とあやまります。すると、生徒たちは「じゃあ、分かった！　こうしよう！」と、むしろはつらつと何か別のものを発見します。あとはそれがどうなっていくかを見守ります。最終的に、「こんなふうになったよ！」という声がクラスに響くことが、一番うれしいです。このような、「ある」ものから「ない」ものを作る出来事が、クラスで一人ずつに最低一回は生じています。

楽しいものが最初からあるのではなくて、どうやったら楽しくなっていくのか。その実感を得るために、支えすぎず、離れすぎず、講師がほどほどによい黒子になることを今後も心がけたいと思います。

『ことば』1～2年
山の学校ゼミ『調査研究』『倫理』　担当　浅野 直樹

僕は昔から「新しい言葉」を覚えるのが好きだったんです。新しい言葉を覚えたら、途端にいろんなところでその言葉を目にする機会が増えるようになるという感覚がすごく好きでした。だから辞書をいっぱい読んで、新しい言葉を覚えて、さぁ、この言葉に次はいつ出会えるだろうと思っているのが好きで……。

その出待ち感の楽しさを読者にも味わってもらいたいというのがあって、あんまり日常生活ではなじみのない言い回しも、小説の中ではわざと使うようにしているんですね。小説で未知の言葉に出会って、そこで「どういう意味なんだろう？」と考え直す感覚を味わってほしかったりもするんです。あの言葉を覚えたのはこの小説だったよな、なんていうのは僕はけっこう覚えているほうなので、それが誰かにとって、僕の書いた本だったりするとうれしいな、というのもありまして。

西尾維新他『西尾維新対談集本題』（講談社、２０１４）p. 62

これは調査研究クラスで現在追いかけている西尾維新さんの対談からの引用です。彼は凡百のライトノベル作家とは異なる趣向を持っているように感じられます。上記の引用からもそれが垣間見えます。軽く読めるということがライトノベルの大きな特徴であり、日常生活ではなじみのない言い回しは軽く読めないからです。

このような新しい言葉との出会いは小学校の低学年あたりでピークを迎えると言えるかもしれません。というのも、ことば１～２年クラスでは受講生たちがあらゆる活動を通じて語彙を増やしていっていることが手に取るように伝わってくるからです。絵本を読む、クロスワードに挑戦するといったことはもちろん、「〇〇ちゃんは笑い上戸だね」といった何気ない日常会話からも新しい言葉を学んでいるようです。

大人になってからも、倫理クラスで行っているように、新たに思想を学べば新しい言葉を仕入れることができます。秋学期になってからだけでも、「無知のヴェール」、「コミュニタリアン」、「リゾーム」といった概念を新しく導入しました。

『ことば』3～4年・4～5年　担当　福西 亮馬

最近、幼稚園の子供たちを引率をしていて、はっと気づいたことがあります。冷たい秋雨が降っていた日の、お帰りでのことです。石壁にかたつむりを見つけました。二匹目、三匹目、四匹目。「今日はたくさんいるなあ」と、歩きながら、子供たちと一緒に見て通りすぎると、年少児の Sara ちゃんが、「なんでなん？」と質問しました。すると年長児たちが「それは、雨が好きだから」「お家ごと動いているから」と教えてくれました。

しばらくたってから、また Sara ちゃんが「なんでなん？」と口を開きました。「え、何が？」とたずねると、「……レインコートがないの？」と。

私はしばらくそのなぞかけに、頭の中をかき乱されました。それから、（ああ）、と彼女の認識したであろう不思議な光景に心を打たれました。今、子供たちは列を作り、黄色いレインコートを着て、山道を下りています。みんなにはそれぞれレインコートがある。なのにかたつむりにはない。『なんでなん？』というわけです。

ここで解釈が分かれると思います。レインコートは決して快適な着物ではない。だから何もなしでいられるカタツムリがうらやましい、というのが一つ。人間には雨具がある。だからカタツムリにもそれを着せてあげられたら、というのが一つ。前者は活動的な晴れ間に対する願い。後者は慈しみ、「猿も小蓑を」の境地です。いずれにしても Sara ちゃんが、その場にいる誰もが言葉にしなかったことを

言葉にしてくれたおかげで、あらためて人間とカタツムリの違いを、「それ」と気づくことができたのでした。

『決定版 一億人の俳句入門』（長谷川櫂、講談社現代新書）で、筆者はこう述べています。

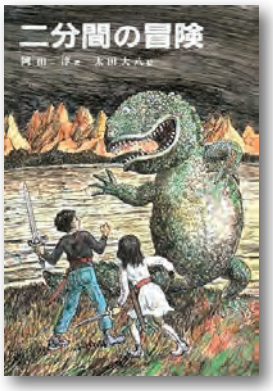
> はっと驚く。そのためには二つの条件がそろわなければならない。一つは、それが作者だけでなく読者の心のなかにもひっそりと眠っていること。もう一つは、**まだ誰もそれを言葉にしたことがないこと。無意識のうちに感じていることを言葉にしたものをみたとき**に、人ははっと驚くのだ。

授業では、上のような体験を貴重だと思って取り組んでいます。３～４年生クラスでは、俳句を中心に取り組んでいます。ここでは一句ずつ紹介します。

暗くてもキンモクセイは明るいよ	Fuka
大もんじよこから見たらかさなるよ	Yu
すごいかぜすいみん中に野分かな	Uta
たけの中水がいっぱいたまってる	Yusuke
きのこさん木についてねかわいいね	Ayaka

「決して意識にのぼることのないもの」を無意識と定義するならば、それをくみ取ることは矛盾に満ちた不思議、あるいは難事だと言わざるをえません。しかし、俳句をはじめ文学という形式は、それに立ち向かう姿を映しているのだと私は思います。

さて４～５年生クラスでは、『二分間の冒険』（岡田淳、偕成社）を読んでいます。残すところあと三十ページほどとなりました。黒猫に「時間をおくれ」と言ったことで、「別世界での二分間」をもらった悟が、その世界にいる竜と戦いながら、隠れた黒猫を見つけ出す物語です。黒猫は「この世界でいちばん確かな姿」をとっています。悟は最初、それを剣だと思い、次に竜、そして仲間のかおりだと思います。果たして黒猫はだれ（あるいは何）なのでしょうか？



悟は、岩から「竜をたおす剣」を引き抜いたことで、自分を「選ばれたもの」だと思い込みます。しかし太郎という少年の示した行動のおかげで、まだ取り返しのつくうちに、その欺瞞に気づきます。悟はみんなの心から「とげ」を抜きます。そして少年少女たちは、お互いに「選ばれたものではない」ことを周知し、協力体制を築き、竜に今までとはちがう「知恵の戦い」を挑みます。なぞなぞ形式に仮託した物語の終幕に向けて、音読にも熱がこもります。

イベントのお知らせ

● 将棋道場 オープン戦

※ 定員がございますので、必ずお申込み下さい（参加無料）

12/18（月） 16：00 - 18：00

対象：**小学生**
定員：15 名（先着）
場所：山の学校教室
講師：中谷勇哉

トーナメント形式のオープン戦です。詰め将棋の問題をみんなで考えたり、指し手について学びあう時間もあります。

「将棋教室」も受講生募集中です。クラス便りは P.16 へ ▶

『かず』3～4年 /4～5年　　担当　福西 亮馬

学年ごとの復習プリントで基礎の確認を、「まちがい探し」でねばり強さを、「パズル」で考えること自体の楽しみを、それぞれ応援しています。

3～4年生は、42÷6のような、わる数が1けたの割り算を重点的におさらいしています。またそれを使う文章題を復習しました。幾何では、ボールの直径と半径についておさえました。パズルでは、整数問題に取り組みました。変則的な硬貨しかない世界で、どのように交換できるのか。たとえば5円玉と8円玉しか流通していなければ、どうやって81円や2円のものを(おつりも利用して)買うことができるのかというように、具体的な例を通して考えました。最近では、幾何から、「50cm の棒をおさめる箱を作りたい。最長の1辺が50cm よりも短くするにはどうすればいいか」という問題を出しました。生徒たちは「うーん」と考えてくれました。ヒントは、箱が「立体」であることです。

4～5年生は、168÷42のような、わる数が2けたの割り算、小数と分数のおさらいに移行しました。また式を立てる際に「線分図」など補助が必要となる文章題に取り組みました。今の時点では、答が合うことよりも、補助を自分で作り出せたり、絵を描いてイメージを膨らませるなど、解法の過程を身に着けることが大切です。水道方式的に、必要最小限の類題をコツコツ解くことを目指しています。

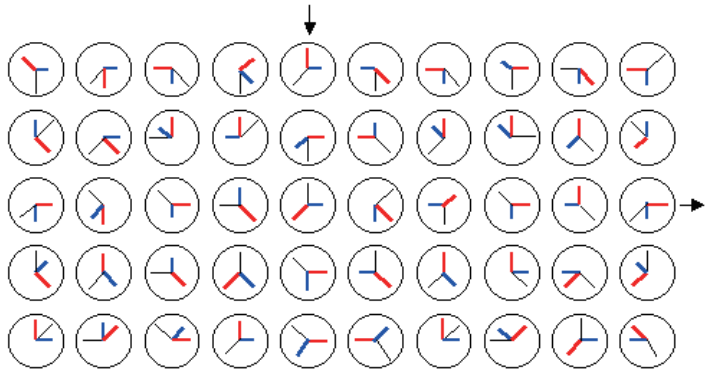
パズルでは、ハノイの塔という問題をしました。2のべき乗（2、4、8、16、32、64……）が隠されたテーマです。そのほか、1円、2円、4円、8円、16円の硬貨しかないような世界で、どのような買い物ができるかを考えました。たとえば31円の買い物には、上のすべての硬貨を「1枚ずつ」使うのが、枚数の一番少ない払い方です。その背景には、今のコンピューターの数理を支える2進数というものがあります。(16、8、4、2、1はそれぞれ2進数では10000、1000、100、10、1と表せ、31は合計11111となります)。そのからくりにいつか「なるほど」と思ってもらえれば幸いです。もうしばらく2のべき乗をパズルのテーマにした後、冬学期では論理パズル（証明問題）を再開する予定です。

『かず』1～2年　『中学・高校数学』B　『高校数学』A・C

担当 浅野 直樹

かず1～2年クラスでは主に迷路を、その他のクラスでは中学数学や高校数学の内容に取り組んでいます。迷路と中学や高校の数学とは一見大きく異なりますが、かなり似たような頭の使い方をします。実例をご覧いただきましょう。

向かい合っている針の向きに沿って進んでください。



時計 http://web.kyoto-inet.or.jp/people/eisaku/maze/clock.html　より

左下の時計を（1, 1）、スタートを（5, 5）、ゴールを（10, 3）のように表記します。ゴールからたどると、(10, 3) →（10, 2）→(9, 3) →（8, 3）→（8, 2）→（9, 2）と進むしかないので、この道を確定させることができます。スタートからたどると、(5, 5) →(4, 4) →（4, 5）は行き止まりなので、(5, 5) →(6, 5）と最初の一歩を決めることができます。かず1～2年クラスの受講生たちの様子からし

ても、ゴールからの道をある程度確定させておくことがこの迷路を解くときのコツです。

> m を 5 以上の自然数とする。次の不等式が成り立つことを、数学的帰納法によって証明せよ。
> $m! > 2^m > m^2$
>
> （長崎大）

先に答案を示します。

> $m! > 2^m > m^2$ …① とする。
>
> (I) $m = 5$ のとき
> $5! = 120,\ 2^5 = 32,\ 5^2 = 25$ より① は成り立つ。
>
> (II) $m = k\ (k > 5)$ のときに① が成り立つと仮定すると
> $k! > 2^k > k^2$
>
> （ア）
> $(k+1)! - 2^{k+1}$
> $= (k+1)\cdot k! - 2\cdot 2^k$
> $> (k+1)\cdot 2^k - 2\cdot 2^k$
> $= (k-1)\cdot 2^k$
> > 0
> よって、$(k+1)! > 2^{k+1}$ が成り立つ。
>
> （イ）
> $2^{k+1} - (k+1)^2$
> $= 2\cdot 2^k - (k^2 + 2k + 1)$
> $> 2\cdot k^2 - k^2 - 2k - 1$
> $= k^2 - 2k - 1$
> $= (k-1)^2 - 2$
> > 0 ($k > 5$ より $(k-1)^2 > 16$ である)
> よって、$2^{k+1} > (k+1)^2$ が成り立つ。
>
> 以上より、$k+1$ のときも① が成り立つ。
>
> 以上より、m を 5 以上の自然数とすると $m! > 2^m > m^2$ が成り立つ。

答案の本体である（II）では、使う条件とゴールが決まっているので、それらをしっかりと意識すれば式変形が見えてきます。

この２つの問題を同じ日に別のクラスで解いたので、受講生の年齢は大きく離れていても、同じような考え方をしていると強く感じたものです。

『中学数学』2～3年　担当　吉川 弘晃

今回のテーマは「手を動かすこと」の重要性についてです。

中学数学では２学期に入ると、2 年も 3 年も（1 次・2 次）方程式について応用まで詳しく学習していきます。生徒の皆さんは、多少過程が複雑になっても計算そのものについてはそつなくこなしています。以前と比べるとミスも随分と少なくなりました。中学数学の重要な目標の一つは精確に作業を遂行することにある以上、この点は皆さんの努力を高く評価したいと思います。

しかしながら、中学数学で本当に求められるのは、問題文の意図や条件を正しく読み取って、それを数式やグラフに変換する力です。特に方程式が絡んでくる問題では、答えを出す計算力が必要なのは当然ですが、それにも増して、問題文を方程式の形で表現する力が必要になるのです。なぜなら、正しい方程式を立てられなければ、いかに高度な計算能力をもっていても導き出される答えは正しいものにはならないからです。

それでは、問題文を数学の言葉に変換するにはどうすれば良いのでしょうか。それは問題文をよく読むことです（教室では難しい問題については生徒さんに音読させています）。まずは、問題文を一読して、求められている答え（速さ、辺の長さ等）が何かを確認します。次に、答えを出すための方法は何だろうかという疑問を持ちながら、もう一度問題文に書かれた情報を読んでいきます。例えば、人やモノの移動に関する問題だと、① 求め

るべき「速さ」や「時間」、「距離」に対してどのような文字を設定するか（x や y は何より大きくて何より小さいのか）、②「速さ × 時間＝距離」という関係を念頭に置きつつ、①で置いた文字を問題文の条件からどのように方程式に直すのか、ということを考えます。また、図形の問題だと、① 求めるべき辺の長さを x と置いた場合に他の辺の長さはどのように表せるのか、② x を求めるための方程式を立てるには、問題文や図形のどの情報を使えば良いのか（四角形〇〇は正方形である、角 A は 45 度である等）、ということを考えます。

とはいえ、日本語と数式やグラフという２つの言葉を互いに「翻訳」する作業は一筋縄ではいきません。もし 5 分以上紙の上で悩んでしまったら、いや悩んでしまう前に、ノートを広々と使って図を描いてください。人やモノの移動に関する問題であれば、出発点と到着点、通過場所を結んだ線を描き、その下に人やモノの移動した距離や速さ、時間を書き込んでいくのです。人や電車、車のイラストを描いても良いでしょう。重要なのは、問題文に書かれている内容を頭のなかでイメージとして再生することなのですから。特に、図形問題では必ず自分で図を描いてください。問題文に図が添えられていることがありますが、これは一見親切で実は皆さんの思考を邪魔しています。時々、角度や長さの関係が少々、歪められた図になっていることもあります。用意された図でたまたま同じ長さに見える辺を勝手に同じ長さであると解釈してしまうことだってあります。重要なのは、綺麗に描けなくとも、自分が問題文から読み取った情報を反映した図を描くことです。そして、描いた図には補助線を入れたり、辺の長さを書き込んだりしてみましょう。その上で再び問題文を読み直せば、今まで気がつかなかった条件の意味が分かるはずです。

『中学英語』（2～3年）　担当　吉川 弘晃

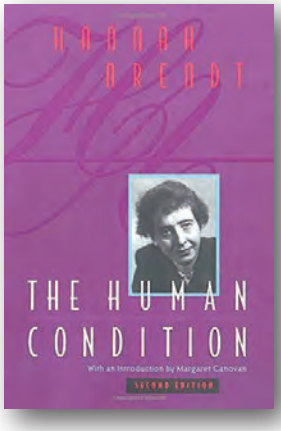
今回のテーマは「文章を暗記すること」についてです。

中学英語のクラスでは、春学期までは個々の単語や熟語を日本語から英語に直す形式の小テスト（毎回 20 語）を行ってきました。それに対して秋学期では、学校で習った文法事項に応じた例文を日本語から英語に直す形式の小テスト（毎回 10 文）に切り替えました。今までは単語を覚えれば良かっただけですが、これからは一定の長さの文を暗記せねばならないので、脳への負担は非常に重くなっていることでしょう。作文では個々の単語が正しく書けても、主語や時制に応じた正しい動詞の変化ができてなければ正解とはなりません。また、前置詞や熟語の使い方が誤っているとさらに減点されます。従って、この小テストに立ち向かうには、これまでにも増して耳（何度も聞く）や口（何度も音読する）、手を動かす（何度も書く）ことが求められるのです。

こうした厳しい鍛錬には多くの時間が取られてしまい、部活で忙しい方や受験対策を急ぎたい方にとっては、面倒に思われるかもしれません。しかしながら、毎回の小テストのための皆さんの努力は次の２つの点で英語力の向上に役立つことでしょう。まず、例文を覚えることで語彙力が増えます。10 の文章があれば、そこには 80～100 語の単語が含まれますが、そこには① 完全に覚えている語、② 頭には残っている語、③ 覚えていない語があるでしょう。③ を覚えることは重要ですが、② については復習の機会と考えてもう一度覚え直すことが求められます。さらには作文で使いこなせる語にできれば完璧でしょう。第二に、小テストを通じて英語を読む力が上がります。自分で文章を書くことで、名詞や動詞の綴りやそれらと一緒に使う前置詞、さらに動詞の格変化や時制について、それまでよりも注意するようになっていきます。そうすると、英語を読む際にも、そうした注意力が生かされ、主語や時制を取り間違えるミスが減っていくことでしょう。第三に、英語を書く力が根本から鍛えられます。書くことは究極的には自分の考えを何とかして自分なりの言葉で表現していく行為です。ですが、その第一歩は他人が使っている文章（例文）の丸暗記です。例文を憶えていれば、一部の単語や動詞の時制を変えてみたりして、自分の文章を作ることができるわけです。高校英語では作文の比重は高まっていますし、社会に出れば、英語を読むだけでなく、書いたり話したりして自分で情報を発信する機会が日本国内でも増えていくでしょう。長期的に求められるこうした「生きる力」をつけるためにも、毎回の例文暗記の小テストには力を入れて臨んでほしいと思います。

とはいえ、一度に多くの例文を覚えるのは（かくいう私にとっても）大変な作業です。最後に例文暗記のために一つだけアドバイスをしましょう。例文を覚えるコツはズバリ、暗記内容を「分割する」ことです。まずは配られた例文プリントを何度か音読した後、覚えていない、もしくは馴染みのない単語や熟語にマーカーを引き、それをリストにして一気に覚えましょう。これは単語テストの対策と同じ方法です。また、従属接続詞で繋がった長い文章を覚える際は、主文と副文に分けて覚えましょう。例えば、He told me to wash dishes after I ate dinner. ならば、主文は He told me to wash dishes、副文は after you I ate dinner です。まずはそれぞれ（特に覚えていない箇所）を音読、筆記練習して、最後に一度で書いたり暗唱したりできるか試します。ポイントは、覚えるべきものを複数に分割して、自分が覚えていない部分を探り出し、それを中心に頭に叩き込んでいくことです。

『高校英語』A・B・C　『英語講読』A・C　　担当 浅野 直樹



英語講読 C クラスではハンナ・アレント『人間の条件』(Hannah Arendt , *The Human Condition*) を読み始めました。labor, work, action という３つの activities が本文の冒頭で区別されます。labor は骨の折れる肉体労働を想起させます。この本の中でも生命を維持するために必要不可欠な労働という意味でこの語が用いられています。work には作品という意味があることからしても、こちらは職人や芸術家の仕事が典型になります。action は具体的な行動です。この本の文脈では古代ギリシアのポリスで演説をする行為が念頭に置かれています。こうした labor, work, action をひっくるめて抽象的に活動を指す語として activity が用いられています。ハンナアレント著、志水速雄訳『人間の条件』(筑摩書房、１９９４) ではそれぞれ「労働」、「仕事」、「活動」、「活動力」と訳し分けられています。

上記のように似ているけれども微妙に意味の異なる語を識別するということは、中級以上の英語学習者にとって重要になってきます。例えば高校生が英検２級を受けようとしたときに突き当たる壁がそこにあります。buy (買う) だけでなく purchase (購入する) という語が登場し、そうした語の意味がわからないと太刀打ちできないからです。大学入試問題でも語句の書き換え問題をよく目にします。

英語講読 A クラスでは毎回のように微妙な語の意味の違いが話題になります。effective と efficient は綴も意味も似ています。前者は effect (効果) の派生語なので「効果的な」であり、後者は「効率的な」です。古いエアコンは部屋を冷やす効果があるという点で effective ですが、電気代がかさむという点で efficient ではありません。motive と motivation の違いはもっと微妙です。どちらも動機を表しますが、motive は犯行動機を記述するときによく用いられるように否定的・客観的なニュアンスがあるのに対し、motivation は肯定的・主観的なニュアンスがあるようです。

『イタリア語講読 I・II』　　担当　柱本 元彦

＜講読 I ＞では、ときおり文法プリントを挟みながら、引きつづきアントニオ・タブッキの『夢の夢』を読んでいましたが、もうあと何篇かを残すばかりです。いわば中級文法にあたる接続法や条件法の使い方など、充分に慣れていただいたのではないかと思います。そろそろ次を決定しなくてはならないのですが、受講生お二人の実力からして＜講読 II＞への合流を考えており、調整中です。その＜講読 II＞ではモーツァルト・オペラ論を続けていましたが、『後宮からの逃走』を最後に一段落つけることにしました。＜成熟した＞モーツァルトのオペラは七つあります。最初の「イドメネオ」と最後の「ティトゥス」は古風なオペラ・セリア、二番目「逃走」と最後から二番目の「魔笛」はドイツ語ジングシュピール、真ん中の三・四・五番目がダ・ポンテ脚本の傑作、「フィガロ」「ドン・ジョヴァンニ」「コジ」です。これも些細なシンメトリーにすぎませんが、つらつら思うに、夭折とはいえ道半ばにたおれたようには見えませんね（未完の「レクイエム」は残念だけれども)。それはさておき、新たに読みはじめたのはカルロ・レーヴィです。小説『キリストはエボリに止まりぬ』が有名で、日本では映画で知られていますが、日本語タイトルが『エボリ』なのは問題です。エボリは南イタリアの小さな町の名ですが、舞台はエボリの向こうのもっと寂しい寒村のアリアーノです。つまり原題は＜キリストはエボリまでやって来たがここには来なかった＞という意味なので、エボリはどこにも出てきません。ともかくそのカルロ・レーヴィが、『キリストはエボリに止まりぬ』の十年後に、シチリアを取材した記録を出しました。それが読みはじめた『Le parole sono pietre』です。さすが 1956 年ヴィアレッジョ賞受賞作、今なお感じることのできるシチリア的問題が目に見えるように描かれています。

『フランス語講読』A・B　　担当　渡辺 洋平

フランス語講読 A のクラスは、引き続きフランスの哲学者アンリ・ベルクソンの『物質と記憶』を読んでいます。例年と同じく夏休み中も開講され、現在は第 2 章の中盤に差し掛かっているところです。

これまでの山びこ通信で、『物質と記憶』の第 1 章が、記憶の介入しない知覚、すなわち「純粋知覚」を対象としていることを書きました。時間的な言い方で言い直すならば、それは過去の入りこまない現在を考察対象にしていたと言うことができます。それに対し第二章で考察されるのは、「記憶」ないし「思い出」であり、したがって「過去」に関する事象です。

ベルクソンは第 2 章の冒頭から、声に出して繰り返すことで課題を暗記するという例をあげながら 2 種類の記憶を区別していきます。日本でも、百人一首や和歌、英語の動詞の活用などを中学校や高校で暗記した人は多いでしょう。何度も繰り返すことで、記憶は堅固になり、安定したものとなります。しかし、例えばある和歌を 10 回口に出して覚えた場合、この一回一回の音読は、他には還元されない独自の体験であり、経験です。1 回目の音読は 2 回目の音読とは違いますし、3 回目の音読もまた、1 回目 2 回目と同様に、一回限りの経験です。したがって、音読によって和歌を覚える経験において、ひとつは一回一回の個別の音読の記憶、もうひとつは繰り返されることによって暗記された和歌そのものの記憶という 2 種類の記憶があることになるのです。

ベルクソンによれば、これらふたつの記憶の違いは根本的なものです。なぜなら一方の音読の記憶は、その本質において繰り返されることのできない一回限りの行為の記憶であるのに対し、他方の和歌の記憶は繰り返しによってしか形成されないものだからです。そして前者を自然発生的記憶、ないし思い出イメージ（image-souvenir）、後者を運動メカニスムと呼び、両者がどのように関係し、日常的な認識が構成されているのかを問うていくのです。一見すると、後者の記憶の方が、記憶を考察するのに適しているようにも思われますが、日常生活において何かを繰り返して覚えることは稀であり、むしろ一回限りの出来事を記録するという点に、ベルクソンは記憶の典型的なあり方を見ています。このふたつの記憶の区別は、『物質と記憶』全体にとっても非常に重要です。

なお、後者の記憶が運動メカニスムとか、運動的と呼ばれているのは、例えばどうしても思い出せない歌の歌詞が、メロディーに合わせて口ずさむとすんなりと出てくるように、この記憶が一種の習慣のように身体の内部に作りだされることによります。

フランス語講読 B のクラスも、引き続きベルクソンの「形而上学叙説」を読んでいます。現在は終盤に差し掛かり、年明け頃には読了できるのではないかと思っています。次のテクストはまだ決まってはいませんが、文学作品を読んでみたいという声があがっています。新規の受講生も随時募集していますので、興味がおありの方はどうぞご気軽にお問い合わせ下さい。

さて、前号の山びこ通信に、ベルクソンの形而上学の特権的対象は「持続」であると書きました。それでは持続とは何でしょうか。それは端的に言ってしまえば「動き」そのものであると言うことができます。この宇宙に存在するすべてのものは変化しており、不変なものはなにもありません。私たちは刻一刻と年齢を重ねていきますし、一見変わらないように見える物や自然さえも、何十年、あるいは何億年という単位で捉えるならば必ず変化しています。このようにあらゆる実在は変化の途上にあり、ベルクソンはこの変化を「傾向 tendance」という言葉で呼んでいます。この傾向を捉えること、これが国家博士論文でもある『意識に直接与えられたものについての試論〔時間と自由〕』以来のベルクソンの主たる関心事でありました。

しかし前号でも書いたとおり、言葉や概念はこの傾向を固定化する性質を持っています。目の前にある物体を「机」と呼べば、それはあたかも一切変化しない机であるかのようであり、ある山を「富士山」と名付ければ、そこには永遠不変の富士山があるかのように見えるからです。それゆえに、

ベルクソンの哲学は言葉や概念が取り逃がしてしまう実在を文章によって捉えようとする、一種逆説的な試みであることになります。実際ベルクソンの文章には比喩が多く用いられているのですが、こうした比喩は概念によって捉えられないものを捉えるために、方法的に用いられていると考えるべきでしょう。ベルクソンにとって比喩は単なる文章表現にとどまらず、実在を捉える手助けをしてくれる手段でもあるのです。

いま読んでいる「形而上学叙説」は講演を元にした論文であり、ベルクソン哲学のマニフェストとでも言うべき重要なものですが、それゆえにまた、具体的な問題には踏み込んでいかないというどこかもどかしい思いを感じるのも事実です。そのような方には、「形而上学叙説」から数年の後に出版された大著、『創造的進化』第一章の冒頭部分や、「形而上学叙説」と同じく『思考と動き』に収録されている他の論文を読むことをおすすめします。ひとつの論文をしっかり読んだ後なら、理解の度も格段に上がることと思います。

『ロシア語講読』　担当　山下 大吾

このクラスでは引き続きプーシキンの短編集『ベールキン物語』を読み続けております。受講生は変わらず T さん、N さんのお二方です。現在は前号でお伝えした「吹雪」を読了し、次編の「葬儀屋」を読み進めております。

両編ともチェーホフを含め今まで取り組んできた作品と異なり、対話あるいは会話の部で発話者ごとに改行されず、さらに長大な段落の続く例が多く見られます。そのためページ全体がびっしりと文字で埋まってしまい、その上そのようなページが連続する体裁で、ドストエフスキイを読むとしばしば接するようなスタイルになっています。あくまで見かけ上の話ですので重要な問題ではないのかもしれませんが、それでも余白の多いテクストに接すると何かしら心理的な圧迫感が減り余裕が生まれるのもまた事実、ロシア語だけに限らず日々の読書でも同様でしょう。ところで当の「吹雪」の原題Метельは「ミチィエーリ」といった風に発音されます。テクストの体裁といい内容といい「みっちり」した作品ですねとはお二方のご感想、笑みのこぼれるひと時となりました。

そのようなユーモアが自然と生れ出た原因の一つとして、主人公シルヴィオの醸し出す雰囲気や性格はもちろん、基本的に復讐劇というシリアスな内容の前回の講読作品「その一発」とは一風変わった、「吹雪」や「葬儀屋」の中で描き出される、一面からりとした内容のそれぞれの作品世界が挙げられるでしょう。偶然の事態の積み重ねによって思いもよらぬハッピーエンドがもたらされる「吹雪」、酔った挙句の一言で散々なひどい目に会うものの、結局それは夢の中の出来事で最後には丸く収まる「葬儀屋」といった具合です。

後者の主人公プロホロフの職業やその性格に接して、以前読んだチェーホフの『ロスチャイルドのバイオリン』の主人公ブロンザやその話の筋が、我々三人それぞれの脳裏に自然と思い浮かび、再び破顔一笑となりました。阿吽の呼吸で同じテクストを読み進めていく貴重な時間が流れています。

『ギリシャ語初級』 新クラス　『ラテン語初級』
『ギリシャ語中級』A・B　『ラテン語中級』A・B
『ギリシャ語上級』A・B　『ラテン語上級』　担当　広川 直幸

ギリシャ語、ラテン語の授業は、初級、中級、上級の三つのレベルに分けている。授業レベルの大体の目安は、初級は初心者向けの入門、中級は散文あるいは平易な韻文の講読、上級は韻文あるいは難解な散文の講読である。経験者は中級以上からの受講が可能な場合があるので、興味がある授業があれば気軽に問い合わせてもらいたい。

今学期は「ラテン語初級」と「ラテン語中級 B」を新規開講した。ラテン語初級では、Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana*（教科書）と *Exercitia Latina*（問題集）を用いて初歩から古典ラテン語を学んでいる。初めから終わりまでラテン語だけで書かれた教科書で、先ず文章を読んで、次にそれを真似して問題（ほぼラテン語作文）を解くという形式なので、コツをつかむのに少し時間がかかると思うが、慣れてしまえば、ラテン語を使う頭の回路ができてくるので、それを楽しみに頑張ってもらいたい。ラテン語中級 B ではプリーニウスの『博物誌』第 7 巻を読み始めた。世界の果ての不思議な人間（？）がたくさんでてくることで有名な巻である。文章に凝るというよりは情報を詰め込むという態度で書かれているからか、ラテン語に独特の難しさがあるが、幸い数年前に学生向けの註釈書がイギリスで出版されたので、それを用いて読み進めている。

従来からの授業はというと、ギリシャ語初級は、Peckett & Munday, *Thrasymachus* を用いて、古典ギリシャ語の初歩を学んでいる。夏期講習を行ったおかげで順調に進んでいる。中級以上はというと、ギリシャ語中級 A はルキアノスの『本当の話』を、ギリシャ語中級 B はプラトーンの『ソークラテースの弁明』を引き続き読んでいる。ラテン語中級 A はキケローの『カティリーナ弾劾演説』。今学期中に第一演説が終わりそうなので、その後は読むものを変えるかもしれない。ギリシャ語上級 A はアイスキュロスの『ペルシャ人』。山の学校で読むアイスキュロスはこれで三作品目である。ギリシャ語上級 B はロンギノスの『崇高について』を少しずつ読んでいる。ラテン語上級は引き続き Catullus を講読している。もうすぐ長めの詩を集めた中盤が終わる。それぞれの授業の学期ごとの進度は山の学校のホームページに掲載するので、そちらで確認してもらいたい。

『新約ギリシャ語初級』　担当　堀川 宏

このクラスでは『マタイによる福音書』を、Nestle-Aland 版で毎回 1 ページほどのペースで読んでいます。現在読んでいるのは第 13 章、有名な「毒麦の譬え」の辺り。「毒麦」は麦に混じって生える雑草で、穂を出さないうちは麦と区別がつきにくいのですが、穂を出せば容易に区別されるようです。イエスはこれを「悪魔の息子たち」であると説明し、刈入れの時（最後の審判の時）にはまとめて焼却されると言います。だから麦（イエスの導きに従う者たち）は、毒麦のことなど気にせずに自分の仕事に精を出さなくてはならない—そのように語っているように読めます。

一般的に言って、譬えによる語りには（往々にして過度の）単純化の危険がつきまといます。何となくのイメージとして理解したつもりになり、細部まで思考が行き届かないことは、私たちが日常生活で触れる（あまり練られていない）譬えにはよくあるように思います。その一方で、譬えの持つインパクトは上手に使えば大きなメリットも生みます。このような性質をおそらく理解した上で、『聖書』の語りは同一の事柄を異なる譬えを使って繰り返し説いてゆきます。それぞれの魅力ある譬えの奥にある思想を窺いつつ、その成果を総合して自分なりの理解を形づくってゆくこともまた、『聖書』の面白い読み方であるように思います。

教える立場にある私自身、毎回新しい発見があり、とても楽しい時間を過ごしています。じっくりとテクストに向きあう贅沢な時間を味わいつつ、もう少し先まで読み進めてゆければと思っています。

『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』　担当　山下 大吾

今学期は一名の受講生をお迎えして、新たに初級文法クラスが開講されました。受講生の Cat さんは、前号の「山びこ通信」に掲載された、山下太郎先生のラテン語学習の意義を説く巻頭文を読まれるなどして受講を決意されたと伺いました。岩波書店刊行の田中利光著『ラテン語初歩　改訂版』を教科書として用い、来学期までの 2 学期で終える予定です。普段見慣れた英語との親近性や、練習問題で見られるラテン語ならではの修辞技法など、教科書の説明だけでは得られない事項をご指摘するよう努めています。

Cu さんとの講読 A クラスはキケローの『老年について』を今学期初めに無事読み終え、現在はその姉妹篇『友情について』に取り組んでおります。古典中の古典ともいうべき作品を原典で完読され、Cu さんは大きな自信を得られたようです。『友情について』は構成その他の点で関連の深い作品ですので、これまでの経験が大いに生かされるものと思われます。これまで通りの堅実な姿勢で読み進めて頂ければと願っております。

Cac さんとの B クラスでは引き続きホラーティウスの『諷刺詩』の第 2 巻を読み進めています。現在は全 8 編の折り返しに当たる第 5 編に入りました。5 編の内容は、『オデュッセイア』11 歌、冥府行での予言者テイレシアースとオデュッセウスとのやり取りを引き継ぐ形で、同時代のローマの遺産相続、あるいは遺産横領の話題を面白おかしく絡めていくというもので、諷刺家ホラーティウスの面目躍如といった感があります。特に 18-22 行にかけての英雄らしからぬオデュッセウスの変節ぶりは出色の出来栄えで、きちんとホメーロスの詩行を踏まえた言い回しになっているのに加え、なによりそのスピード感も相まって抜群の効果を上げています。

C クラスでは今学期から受講生の Ci さんのご要望で、講読作品はキケローの『義務について』に変更となりました。その冒頭部では、アテーナイで勉学を続ける息子マルクスに対して、哲学と弁論双方に、どちらか一方に偏ることなく熟達するよう説いています。ギリシアでは現れなかったその模範的人物こそ父であるキケローその人です。プラトーンやアリストテレース、デーモステネースといった錚々たる偉人の名を挙げながら、特に文体の点で、哲学弁論双方に通暁したという自身の功績を誇らしげに語る彼の姿は、語り掛けている息子のみならず、二千年以上の時と洋の東西を超え、全人的教養を体現する第一の鑑として、私たちの目の前に聳えています。

『将棋教室』　担当　中谷 勇哉

時間が 90 分になったことで、最初の講座部分を短縮し、できれば３局行えるようにとやっています。

今期の目標は、「より多くの駒を活躍させること」と設定しました。そのために、「駒落ち将棋」をうまく活用できたらと思っています。

駒落ち将棋とは、上の級の子が角や飛車などの駒を最初から抜いて対局することで、一般的には、レベルを合わせて勝敗を拮抗させるために行われます。級が上がってきた子は、下の級の子と対局する場合に、この駒落ち将棋を経験することになるのですが、この教室では、単にレベルを合わせるという意味だけでなく、上手や下手の棋力向上も目的にしています。

たとえば上手は、受けの弱い低級者を相手にした場合、飛車という最も強力な駒と銀のみで攻める、（原始）棒銀と呼ばれる攻め方を知っているだけで、その他の駒を全く動かさなくても気持ちよく勝つことができてしまいます。しかし、こういう攻め方ばかりしていると、駒落ちで飛車を落とした場合に、一気に棋力が下がり、下の級の子にコロッと負けてしまいます。これを経験していくと、他の駒を組み合わせて攻めの形を作ることを覚えていけます。

また、下手にとっての駒落ち将棋は、相手の弱点を見極める練習になります。たとえば、相手に香車や桂馬がない場合、盤面の端の守りが弱くなります。何度か経験するうちに、自然とその筋に飛車や角などの戦力を投入することを体得することができます。

駒落ち将棋というのは、レベル差が生まれた結果の偶然的な出来事ですが、今後はこの状況も利用して、生徒の棋力向上に役立てていけたらと思っております。

『しぜん』A・B1・C1・C2　　担当　梁川 健哲

▲ひみつ基地前で「おはらい（地鎮祭）」が行われました。

A クラス

9 月最初のクラス。いつものようにみんなが書いてきた絵日記の発表会をしました。その中には、夏休み前に「梅ジュース」を仕込んだ際、拾って帰った一粒の梅の実が、その後しぼんでカビが生えるまでの様子を記録したものがありました。「落ちて死んでしまった梅だったのだけれど。」H ちゃんは何気なく言いました。梅の実は、生きているのでしょうか。生きているとすれば、いつ「死ぬ」のでしょうか。木の枝に付いている時は生きていて、離れた時死ぬのでしょうか。または、離れても生きているのでしょうか。（同じ問いを B クラスにも投げましたが、意見は様々に分かれました。）

かたや 2 週間で腐ってしまった H ちゃんの梅があり、かたや琥珀色の液体の中でシワシワになって浮かんでいる梅があり、その甘酸っぱい液体を飲むと、生気が甦るように元気が出る…。これらは、どういうことなのでしょうか。「生きている」とは。「腐る」とは。立ち止まって考えてみると不思議なことは沢山あります。

色々なことをして過ごすしぜんクラスですが、私はそのようにしてあれこれ考えてみたり、議論をしたりする時間も折々大切にしたい（A クラスに限らず）という想いを込めて、この日「てつがく」という言葉を紹介し、国語辞典で引いてもらいました。また、みんなはその「入口」に立つ体験を既に沢山してきていることも指摘しました。ここでは学問として追求する訳ではありませんし、正しい、間違っている、ということではなく、誰もが自由に考え、意見を交わすことが重要で、少なくとも不思議なことを不思議なままに面白がったり、有難がったり、草花や虫、他者の生き様を自分と比べたり、重ねたりしてみる経験は意味深いことに他なりません。

森の中を駆けまわったり、2 年が経つ「ひみつ基地」の修繕をしたり、鳥の巣箱をしかけたり、これから楽しいイベントが沢山待っている中で、みんなとの対話を大切に過ごして行きたいです。

B クラス

「たんぼにすずめがたべにきていました。てをたたいてみたらいってでんせんにとまりました。もいっかいてをたたいてみたらやねにとまりました。F（私）とスズメはぜんぜんちがいます。」クラスでは今、F ちゃんが毎回「にっき」を書いて来てくれます。ここにもみんなで考えるヒントが沢山あります。

拍手で発表会が閉じられたあとは、いつものように森へ散策にでかけます。ある日、誰かが何気なく木に登り始めたのをきっかけに、次々とみんなが木登りを始めました。株立ちした木には、手足を突っ張るように広げて、一本立ちの木にはしがみつくようにして、また、誰かが「ここまで登れたよ！」と言えば、「私も！」と言ってチャレンジが続きます。裸足になる子もいました。どこまで進むかは無理せず見極めること、心して降りること、要所で声掛けをしながら見守ります。

木登り大会がひとしきり終わると、S ちゃんが、「大縄跳びしようよ！」と呼びかけます。一端を木に括りつけて、回したり跳んだり、全員で何回跳べるかをチャレンジしたりが、クラスの残り時間に延々と続きました。

▲ロープがあるときの、いつものスタイル。みんなで連なって森へ出かけます。

汗をかいて、沢山笑って、みんなが今、大事な時間を過ごしているのだということに、疑いの余地はありませんでした。

C1クラス

雨が降る日もみんなは外を散策したがります。教室へ来る途中に見つけたカタツムリをSo君が連れてきて、案の定、雨の中での生き物探しが始まりました。その日はカタツムリとコケが中心となりました。コケは私が勧めたものでしたが、An ちゃんは「あ、ここにも！」と言いながらあちらこちらの隅っこにあるコケを発見し、その手触りを確かめながら一摘みずつ色々な種類を集めていました。他にも、萩の葉の上のコロコロとした雨粒や、ゼリーのようにプルプルした桜の樹液、雨の中を何処かへ向かうカマキリなど、色々な発見がありました。

部屋に戻ると、カタツムリが這う様子や、微かな黒い点のような目などを詳しく観察しました。この日のきっかけを作った So 君でしたが、カタツムリを手に取ろうと殻をつまみ上げるとき、吸着力によって体が伸びて負荷がかかるのが怖いようでした。そこで、カタツムリが行く先に、じっと指を横たえて見せると、カタツムリが短い触覚で指を確かめたあと、ゆっくり頭を持ち上げて指に這い上ってくる様子を観察することができました。これは、手に「導く」方法です。殻をつまんで掴みたい場合は、真上ではなく、斜めにスライドさせるように持ち上げると比較的剥がれやすいです。

別の日にも、小さいカナブンとクワガタを見つけてクラスの間ずっと可愛がっていたことがあります。そんな生徒さんたちの眼差しに寄り添って、みんなで「虫の目」になって過ごす時間を大切にしていきたいです。

C2クラス

いつものように散策する沢の湿った砂地には、ヒヅメの形までくっきりとした動物の足跡が残されており、子どもたちは歓喜の声をあげます。ベテランの猟師さんは、足跡を見ただけで、動物の種類は勿論、その体格や頭数、行動パターンまで目に浮かぶそうです。そんな話をすると、みんなも「これは鹿だな！」「あっちから来て、こっちへ向かっている！」など、推察の限りを声に出し合っていました。

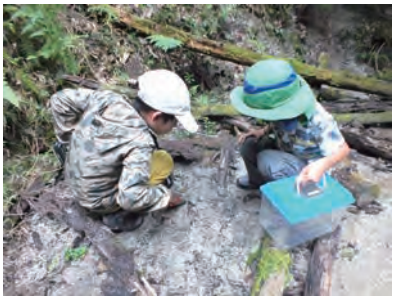
また、クワガタやカブトがいそうな木を見上げても、その姿が見つかることは少ないのですが、根本付近の枯葉をどけると、クワガタの頭部やカブトのツノなど、そこには確かな生き死にの痕跡を見つけられます。ただ、そうなると、益々生きた姿を捉えたくなってくるものです。ある日、Kotaro 君が「バナナトラップ」を仕掛けようと提案し、みんなで設置場所を予め決めておき、次のクラスの前日に、私が仕掛けておきました。残念ながら昆虫はかかっていませんでした。

昆虫や沢蟹や蛙を見つけると、捕まえたくて仕方がなくなることは、みんなにとって本能に近いようなものだと思います。手に取ったり、飼育に挑戦したりして、間近に命を感じる貴重な体験を、クラスのみんなは重ねています。

私からは、少し異なる触れ合い方についても、みんなに提案し始めたところです。生き物を発見したら、警戒されることなく、どこまで近づけるかチャレンジするのです。少し心のゆとりを持って、ありのままの行動や、

佇まいを見つめてみる。逃げてしまうかもしれないけれど、その瞬間に集中する。そうやって私自身、日向ぼっこするトカゲの瞬きやあくびを 10 センチ目の前で眺めたことも、草むらでじっとしているバッタの膝をそっと撫でたこともあります。

極めて野性的かつ活動的な男の子達だからこそ、スパイスとして、そんな瞬間も共に出来ればと思っています。



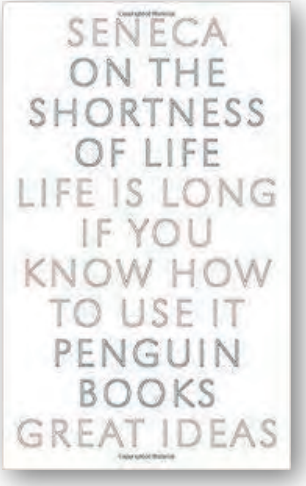
『しぜん』B2　　担当　森山 純

今学期からクラスのメンバーが５人に増え、男子の数が優勢になったことで非常に活発な雰囲気になりました。また、今までは同学年メンバーで構成されていましたが、今学期から１、２、３年生の混合メンバーになりました。今までは同学年特有の絆のようなものがあり、新メンバーが入ってもすぐになじんでいましたが、今学期はまだ学年の差に起因する心の壁が完全には取り除けていません。特に、普通の会話でも下の学年のメンバーが上の学年のメンバーからの何気ない一言に圧のようなものを感じてしまっている気がします。学年の差を取り除き、心をひとつにすることが残り３回の秋学期の課題です。

今学期初回は雨が降ってしまったため、屋内での活動になりました。私のクラスでは、「大雨の日はヘビと戯れる」と決めており、昨年も好評だったため私の飼育しているシマヘビを持って行きました。しかし、昨年はいなかった２人が予想以上の拒否反応を見せ、初回の開始５分で、悲鳴をあげて机の下に隠れ、涙目で帰りたいと訴えられる状況に陥ってしまいました。動揺する私を差し置いて，その状況を見事に打開したのは,ヘビに慣れた“先輩”たちでした。上手にヘビを扱うメンバーを見て､怖がっていた２人も徐々に近づき、わずか３０分後には触れるようになり、帰り際には「次回も雨が良い」とまで言うようになりました。結果的に、「目の前の問題をチームで解決する」という、チームワークを産みだすとても良い体験になったのではないかと思います。今後は徐々に寒くなるにつれて、生き物探し以外の活動がメインになってきます。そこでまた、全員で協力するような活動を通してメンバーの心をひとつにしていけたらと考えています。

『西洋古典を読む』

担当　福西 亮馬



このクラスでは、セネカの『人生の短さについて』（De brevitate vitae）を英訳で読んでいます。テキストは、『Seneca On the Shortness of Life』(C. D. N. Costa 訳、Penguin Great Ideas、2005) です。春学期は和訳を読むだけでしたが、そこに英訳（を和訳する作業）が加わりました。ペースは半分になりました。それをもちろん善いこととして、思い出にしてもらえたらと願っています。

加えて、岩波文庫の茂手木元蔵訳、大西英文訳、光文社の中澤務訳、PHP の杉浦計子訳も比較参照しています。和訳が豊富に出ていることは、道案内として、本当に心強いです。そして注釈を見て、もっと詳しく知りたくなった箇所では、ラテン語の原文に食指を伸ばしています。時々、生徒の Aika さん自身にも、単語レベルで辞書引きに挑戦してもらっています。

さて、秋学期は、全 20 章のちょうど折り返し地点にあたる、11 章から読んでいます。「こういう連中の暇は、暇ではない」「怠惰な多忙だ」「病気だ」といった記述が続きます。そして英訳のテキストでは、leisure と preoccupied という単語が頻出します。「暇」と「多忙な（人）」です。原文ではそれぞれ otium（オーティウム）と occupatus（オックパートゥス）が対応します。後者は occupo（掴む）から作られた形容詞で、掴まれた、常に何かで心を占領された状態のことです。

セネカの言う「暇」とは、自分のために自覚的に使用した時間のことであって、その蓄積が人生を「完成」させ「長い」と感じさせるところの「現在」です。だから能動的で充実したものです。

一方、これに対抗するものが「多忙」です。自分の時間を「未来と他人」に預け、「とらぬ狸の皮算用」に忙しい状態を指します。

12 章 3 節で、次のようなパンチのある表現に出会いました。国の乱れよりも、頭のセットの乱れを心配する人についてです。

Do you call those men leisured who divide their time between the comb and the mirror ？（C. D. N. Costa 訳）

原文も見ておきます。

hos tu otiosos vocas inter pectinem speculumque occupatos ？

直訳すると、「櫛（pectinem）と（que）鏡（speculum）の間で（inter）忙しい（occupatos）この者たちを（hos）、暇な人たち（otiosos）だと、君は（tu）呼ぶのか（vocas）？」となります。もちろん反語的表現です。上の英訳では、occupatos の部分を、divide their time としているのが見てとれます。

あるいは、とセネカは続けます。物まね役者（mimus）が風刺するような贅沢で、基本的生活習慣さえも誰かに依存してしまい、自分が現在何をしているのかさえ把握できないような便利さに染まった人々。その彼らが、死ぬ直前まで無自覚である、受動的な「繰り返し」。それを「怠惰な多忙」と呼んでいます。そして、「自分の体の有様を知るのに他人に教えてもらう必要のあるような人間が、一体どうして時間の主人となりうるであろうか」（茂手木元蔵訳、岩波文庫、12.9）と、セネカは断じています。それを受けて、Aika さんは、「スマホのアプリに自分を管理してもらうようなことですね」と言いました。なるほど確かに、時代が変わっても人間はそれほど変わらないのだなと私も気づかされました。

発行元　学校法人北白川学園　北白川幼稚園・山の学校　京都市左京区北白川山ノ元町41
FREE PAPER

お申し込み、お問い合わせはこちらまで　TEL: 075-781-3215　FAX: 075-781-6073　E-mail: taro@kitashirakawa.jp